

タイトル	礼文島における神社信仰について
著者	坪田, 芳典
引用	北海学園大学大学院 法学研究科論集(21): 107-127
発行日	2020-03-19

〔調査報告〕

礼文島における神社信仰について

北海学園大学 大学院 法学研究科 博士（後期）課程・政治学修士

坪田 芳典

目次

はじめに

1. 北部の神社信仰

- (1) 西海岸地域 (A 地区)
- (2) 東海岸地域 (B 地区)

2. 中部の神社信仰

- (1) 西海岸地域 (C 地区)
- (2) 東海岸地域 (D 地区)

3. 南部の神社信仰

- (1) 西海岸地域 (E 地区)
- (2) 東海岸地域 (F 地区)

むすびにかえて—いくつかの考察

- (1) 鉄府の弁天(厳島)の祠について
- (2) 見内神社について
- (3) 狛犬研究の成果から
- (4) 全体を通して

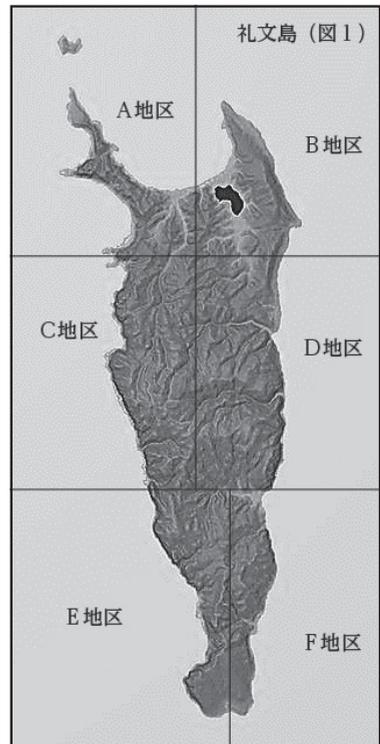
はじめに

礼文島における神社信仰については、『礼文町史』（以後、『町史』と略する）¹と『北海道開拓記念館調査報告』（以後、『調査報告』と略する）²に記載されている。この『調査報告』からは社の数や配置、社のある地域とその祭神との関連性を、『町史』からは部分的ではあるが、主な社の歴史をそれぞれ知ることができる。

これらの資料は今から約30年前のものであり、2009年の藤沢隆史氏による狍犬に関する調査³や、礼文町教育委員会による調査はあるものの、礼文島における神社の意義や、近世以降にはなるが、礼文島にいつ、どこを中心として和人が定住していったのかという問題を取り上げているものはない。

そこで、このような社の祭神や配置から、礼文島の歴史を見ることができないのではないかと考え、2017年から2019年にかけて『調査報告』を基礎とした現地調査を実施した。この調査は、2つの旧村社である香深巖島神社、船泊礼文神社を中心に各集落神社の現状を確認し、可能な限り各地域の古老から聞き取りを行った。

まず報告する上で便宜上、礼文島をAからFの6地区に分類した。その分類は、島を北部・中部・南部に分け、その3ブロックをそれぞれ東海岸と西海岸に分けた6地区である。つまり、北部の西海岸地域をA地区、東海岸地域をB地区、中部の西海岸地域をC地区、東海岸地域をD地区、南部の西海岸地域をE地区、東海岸地域をF地区とした。図1を参考にして貰うとわかりやすい。



1. 北部の神社信仰

(1) 西海岸地域 (A地区)

①海驢島の弁天(厳島)の祠

所在地は海驢島で、祭神は市杵島姫命。『調査報告』に「個人あるいは講の運営」⁴と記されていることから、この調査では海驢島に渡って祠を確認したのかもしれない。しかし、現在は無人島となっているため調査するのは困難である。またスコトン岬から海驢島を見ても祠らしきものは見えないことから、島の北側に位置しているのかもしれない。

②須古屯(スコトン)神社

所在地は須古頓で、祭神は稲荷大神、金毘羅神。鳥居は朱色で、須古頓の漁港を向いている。

『調査報告』に「須古屯の稲荷神社と白浜の金毘羅神社を合併して新しく建てた神社である」⁵と記されている。

この「白浜の金毘羅神社」については、「戦中に海軍基地宿舎の予定地となり移転したといわれている」⁶と記されているが、現在は所在不明である。

③鮑古丹(アワビコタン)神社

所在地は鮑古丹で、祭神は稲荷大神、八大竜王。鳥居は木目のある白色またはクリーム色で、鮑古丹の漁港を向いている。

『調査報告』によれば「明治中期頃に部落神社として建立したといわれ」⁷、また「旧社殿はもう少し上の方にあったが火事で焼け、昭和10年(1935)に現在の社殿を造営したといわれている」⁸と記されている。

④江戸屋(エドヤ)神社

所在地は江戸屋で、祭神は稲荷大神。鳥居は朱色で、江戸屋の漁港を向いている。

『調査報告』に「明治末期の創建といわれ」、「旧社殿の場所はもう少し上であったが、戦前に今の場所に移し」、現在の社殿は「昭和27年(1952)頃建てたものである」と記されている⁹。

⑤浜中(ハマナカ)神社

所在地は浜中で、祭神は稲荷大神。鳥居は朱色で、海を向いているが、これは元々の浜中の漁港が現在の位置とは異なるため、そう見えているのであろう。

『調査報告』に「神社の起源は建網漁家沢口庄助の建立した祠を部落で継承したものといわれて」おり、「社前の維持管理の問題から昭和43年（1968）に神社を廃し、ご神体を礼文神社に預けたが、昭和48年に新しい場所に社殿を新築して再び祭祀している」と記されている¹⁰。

また、木造の鳥居に「大正14年」（1925）に「坂野広、山下菊ほか」が修復したと記されている¹¹。

⑥ 浜中の稲荷の祠

所在地は浜中で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』には「個人あるいは講の運営」、「柳谷家」と記されていることから¹²、これは「柳谷家」による「運営」とみてよいだろう。ただし、現在は所在不明である。

⑦ 鉄府（テップ）神社

所在地はテップで、祭神は稲荷大神。鳥居は朱色で、鉄府の港を向いている。

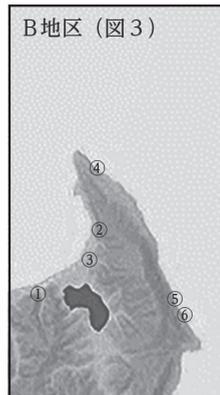
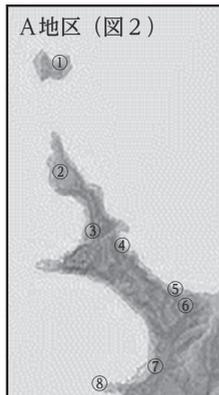
『調査報告』には「明治期の創建といわれ、社殿はもう少し上の場所にあったが吹雪でとばされ、現在の場所に移した」と記されている¹³。

しかし、平成30年（2018）の暴風により破損したため、平成31年（2019）に新築した。

⑧ 鉄府の弁天（巖島）の祠

所在地は鉄府にある稲穂ノ崎で、祭神は市杵島姫命。鳥居は朱色で、海または岩を向いている。

『調査報告』には「個人あるいは講の運営」とだけ記されている¹⁴。



(2) 東海岸地域 (B地区)

①大沼 (オオヌマ) 神社

所在地は大備 (オソナイ) の久種湖畔に位置する。祭神は天照皇大神, 大国主神, 八大竜王。鳥居は白色で, 久種胡を向いている。

『調査報告』には「明治32年 (1899) 藤原平吉, ナツが建立した祠をもとに同35年 (1902) この地域の人たちが協力して大沼神社としたのが起源である。現在の社殿は昭和2年 (1927) に造営したものといわれる」と記されている¹⁵。また現在でも「昭和三年六月建立」と彫られた御神燈が左側に, 「平井昇」と彫られた御神燈が右側に残されている。ちなみに狛犬の一部も現存しているが, 狛形像であること以外はわからない。

『町史』には, 所在地が「船泊字ウインナイホ」で「氏子数」は「二百戸」と記されており¹⁶, また神社の由来については「遠く明治三十二年に藤倉平吉, ナツ夫妻が敬神の念厚く小さき社を建て神を祭ったのがはじまりであるが, 同年三十五年十兵衛沢近辺の人々が相協力し大沼神社として建設したもの。同三十七年にいたり村社礼文神社建立されるに及び大沼神社を分離し氏子十二名相集い部落の神社として維持経営に当たることを申し合せ大正八年親和組合を結成し, 毎年一月七月祭典を催している。久種胡の結氷を利用して貯水販売事業を, 或いは養狐事業などをしてその収益を維持費用に当てるなど協力し合い, 爾来数十年, 昭和二年現在地に新築し移転遷宮し, 同十年及び同四十一年土台屋根など修理営繕し現在にいたった」と記されている¹⁷。

②礼文神社

所在地は大備 (オソナイ) で, 祭神は天照皇大神, ^{コトシロヌシ} 事代主命, ^{オオワタツミ} 大海積命。鳥居は白色で, 船泊の市街地に向いている。

『調査報告』には「旧村社」で, 「一説に文久3年の創建といわれるが, 船泊の中心的神社として整備されるのは明治32年頃になってからで, 「明治32年に神社の場所を現在の地に移して社殿を造営し, 大正15年に村社となっている」と記されている¹⁸。また, 「明治35年春」「青森県津軽 清野ハル」と彫られた自然石の手洗鉢, 「明治37年7月6日」「小樽区 麻里英三, 彫刻人京都市 高橋仙助」と書かれた神名額, 「明治38年春」「越前国鮎川 本藤茂助」と彫られた狛犬 (唐獅子), 「大正元年」「越中国岩瀬 梶栄次郎, 富山政次郎」と彫られた石燈籠, 「大正4年秋」「船泊 内山太吉」と彫られた石門標, 「昭和11年6月」「福井千里, 平井芳宝など12名」と彫られた大燈籠が現存している¹⁹。さらに, この『調査報告』によると「大正13年12月」「須藤亀吉, 竹本京太郎, 向井鉄

太郎など」と刻まれた鳥居（木造）から「昭和10年6月」「梶栄次郎」と彫られた鳥居（石造）に交換されたことが読み取れる²⁰。

『町史』には、所在地が「船泊字オションナイ」で「氏子数」は「六百戸」と記されており、また神社の由来については「文久三年頃の創立との記録は残されているが、当時の社殿ならびに所在地などは一切記録にない。一説には久種胡の神霊を当時の住民が尊崇して祀ったのが初まりともいう。明治三十二年に至って天照御大神を祭祀、同三十五年に礼文神社と改称するまで沼神々社と呼ばれていた。礼文神社と改称のとき社殿の新築移転の議が起り現在地に移転工事をはじめ翌三十六年一月に社殿新築落成と共に旧社より遷座し住民一般の守護神として現在に至った」と記されている²²。

北海道神社庁のホームページによると、神社の由来は「文久3年青森県人秋田佐吉及田中太四蔵等が、本村茂尻湖（現久種湖）の主神として大沼神社と称し、湖畔の一隅に小祠を建築し崇拜された。後に、船泊村の人口増加に伴い村民は、この神社を氏神と仰ぎ崇敬したが、祭神が不詳であった。明治32年に天照大神、大海積大神、事代主大神を奉祀し、礼文神社と改称、同年11月5日創立出願、同34年1月31日創立許可される。同36年1月現在の地へ社殿新築落成し、遷座奉斎す。大正15年5月12日村社に列し、神饌幣帛料供進神社に指定される。昭和21年8月1日宗教法人となる。昭和27年6月28日、神輿新調する。旧神輿は、浜中神崎神社へ譲渡される。昭和48年7月10日、御社殿改築落成とともに、遷座奉斎され現在に至っている」と記されている²³。

③船泊の竜神の祠

所在地は船泊で、祭神は八大竜王。鳥居は見当たらない。

『調査報告』には「個人あるいは講の運営」、「昭和20年代に小樽から勧進」と記されている²⁴。

この祠の中に「金毘羅宮」の「海上安全」と「漁獵潤沢」を祈願した木札が収められている。またこの祠の管理は船泊の町内会が行っているという。

④幌泊（ホロトマリ）神社

所在地は幌泊で、祭神は稲荷大神、八大竜王。

『調査報告』には「創建は明治末期頃といわれ、旧社殿は大正初期に建てられたもの」であり、「礼文飛行場建設に伴う用地との関係から神社を廃し、ご神体を礼文神社へ預けたが、昭和55年頃、自治会館の中へ納める」と記されている²⁵。

⑤高山（タカヤマ）神社

所在地は高山で、祭神は稲荷大神。鳥居は朱色で、高山の港を向いている。

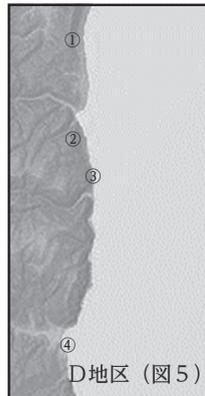
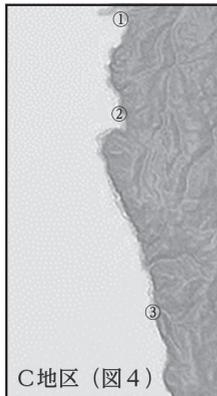
『調査報告』に「明治中期の創建といわれ」、「村中安全」のために奉納された「明治31年6月22日北見国礼文郡船泊字高山神社」と書かれた太鼓が残されていると記されている²⁶。

また、「昭和19年」（1944）に奉納された「賽銭函」も記されている²⁷が、奉納者は不明である。

⑥高山の稲荷の祠

所在地は高山で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「個人あるいは講の運営」²⁸と記されているのみで詳細は不明である。



2. 中部の神社信仰

（1）西海岸地域（C地区）

①西上泊（ニシウエドマリ）神社

所在地は西上泊で、祭神は稲荷大神。鳥居は朱色で、西上泊の港に向いている。

『調査報告』には「神社の起源は建網漁家、西宮弥吉の建立した稲荷社を部落が継承したものといわれ」、「旧社殿はもう少し浜寄いであったが10年ぐらい前に道路工事のため現在の地へ移した」と記されている²⁹。

②召国（メシクニ）の稲荷の祠

所在地は召国で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「個人あるいは講の運営」, 「三谷番屋のものといわれる」と記されている³⁰。

③宇遠内（ウエンナイ）神社

所在地は宇遠内で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「現在は社殿のみ」³¹と記された通り、現在も変わらない。

（2）東海岸地域（D地区）

①赤岩（アカイワ）第一区稲荷神社

所在地は赤岩で、祭神は稲荷大神。鳥居は朱色で、赤岩の港を向いている。

『調査報告』に「明治中期頃の創建といわれ」, 「古くは上泊にあったが大正末期頃に現在の場所に移し」, 「現在の社殿は昭和37年頃新築したものである」と記されている³²。また、「明治34年5月吉日」に「上泊赤岩氏子中 船頭 山崎治郎吉」が寄進した太鼓が現存している³³。

②内路（ナイロ）神社

所在地は内路で、祭神は稲荷大神。鳥居は朱色で、海を向いている。もしかすると、その方向に旧港があったのかもしれない。

『調査報告』に「古い社殿は現在地蔵が建っている場所の上の方であったが雪崩れのため、浜側に移し、さらに30年ぐらい前に起登白寄りの現在の場所に移している」と記されている³⁴。

③起登白（キトウス）神社

所在地は起登白で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「神社の起源は建網漁家駒谷勝太郎の建立した祠を継承したものであるといわれ」, 「古くはアワビ養殖センターの場所に社殿があったが時化で流され移転しさらに昭和50年頃自治会館の中に納められている」と記されている³⁵。

④見内神社

所在地は香深井で、祭神は見内神威、稲荷大神。鳥居は朱色で、海に向いているのが1つ、道路または山側に向いているのが左右に2つずつの計4つある。

『調査報告』に「アイヌの悲恋物語の伝説を神社創建の由来とし、祭神は岩である、のちに稲荷大神を合祀する。この地域の建網漁家駒谷三蔵との関係が

深く、明治27年に今の社殿を造営している」と記されている。また「大正九年」「~~イ~~藤」と書かれた社号標、「昭和13年3月21日」「沢口與吉」と書かれた賽銭箱が現存していると記されている³⁶。

3. 南部の神社信仰

(1) 西海岸地域 (E地区)

①元地 (モトチ) 神社

所在地は元地で、祭神は稲荷大神、八大竜王。鳥居は朱色で、元地の港を向いている。

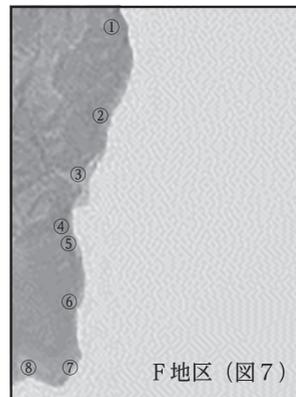
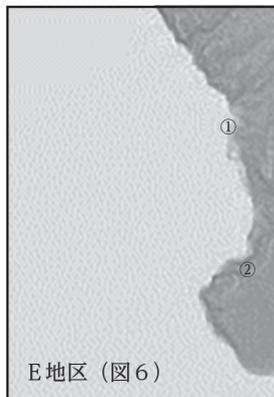
『調査報告』に「神社の起源は建網漁家柳谷文蔵の建立した稲荷の祠を部落神社として継承したものといわれ」、「火災で旧社殿を焼失しており、古くからの神社用具や書類は残されていない」と記されている³⁷。

②元地の竜神の祠

所在地は元地で、祭神は八大竜王。鳥居は朱色で、海を向いている。

『調査報告』には「個人あるいは講の運営」で、「明治40年3月20日建立の石碑あり」と記されている³⁸。この石碑は「天野政吉」の寄進による「八大竜王碑」である³⁹。

現在は昭和42年(1967)に開設された「桃岩荘ユースホステル」の敷地内にある。



(2) 東海岸地域 (F 地区)

①手然 (テシカリ) の稲荷の祠

所在地は手然で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「個人あるいは講の運営」で「原田番屋のものといわれる」と記されている⁴⁰。

②津軽町神社

所在地は津軽町で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「古い祠の上に新しい社殿をかけたもので、建網漁家の祠を継承したものとされている」と記されている⁴¹。

この祠は江戸家によって管理されていたが、維持の問題からご神体を祠から自宅に移したという。

③巖島神社

所在地は香深で、祭神は市杵^{イチキシマヒメ}島姫命、事代主神、三吉^{コトシロノヌシノカミ}大神。鳥居は香深港を向いている。

『調査報告』に「文化元年場所請負人藤野伊兵衛の支配人岡田半兵衛が弁天社を建立。のち巖島神社と改称、明治9年村社、旧社殿は明治22年の土砂崩れで崩壊、明治23年頃現在の場所に移る。昭和7年に三吉神社、同8年に事代主命を合祀」と記されている⁴²。また「天保三年」「柏屋小平」と記された鳥居の一部、「明治二十二年四月吉祥日」「北見国香深村 駒谷船」と書かれた絵馬(賤ヶ岳の七本槍)、「明治二十四年七月吉辰日」「遠藤米蔵」と書かれた絵馬(賤ヶ岳の七本槍)、「明治二十五年七月吉日」「山際チイ」と書かれた絵馬(えびす、大黒)、「明治二十五年辰五月吉日」「讃岐国三野郡粟嶋 岡村喜三郎」と書かれた絵馬(船)、「明治二十六年三月吉日」と書かれた絵馬(天の岩戸)、「明治二十八年六月二十六日」「香深村エコキナイ 亀田靄女」と書かれた絵馬(えびす、大黒)、「明治三十年七月十五日」「青森県竹内長太郎 全県黒石柱 加藤虎太郎」と彫られた御神燈、「大正三年四月二十日」「扱問屋 向瀬徳次郎」と書かれた絵馬(汽船)、「大正五年六月吉日」「講中 製造人 京都市寺町通 五条北入 水原庄太郎」と書かれた御輿、「大正十二年五月」「瀬川久次郎 五十九才」と彫られた石造りの鳥居、「大正十五年八月」「進藤兼太郎 還暦記念」と彫られた石造りの鳥居、「昭和六年五月」「礼文香深 渡辺利三二、還暦記念」と書かれた社号標、「昭和六年六月吉日」「吉野谷久之允、むめ」と彫られた鳥居、「昭和六年一月十日」「関キヨ、松山タセ」と刻まれた御神鏡、「昭和七年

一月十五日」「小林大助」と書かれた絵馬、「昭和十五年三月」「世話人 加藤清治ほか」と彫られた随神像、「昭和七年二月吉日」「元山春吉、三吉大神」と書かれた神額（合祀額）、「昭和八年初春」「元山春吉 事代主命」と書かれた神額（合祀額）、「昭和九年七月吉日」「上出三松」と彫られた常夜燈、「昭和九年」「和泉佐吉、セン」と彫られた常夜燈の台のみ、「昭和九年五月吉日」「広岡タマ、瀬川シモ、森山ミヨ、深井マツなど」と彫られた手洗鉢、「昭和十五年十二月吉日」「栗山ヤス」と書かれた締太鼓、「昭和三十四年」「中村栄松、スエ」と彫られた狛犬が現存されていると記されている。その他に、昭和3年に「瀬川久次郎、妻ハツ」によって鳥居が、昭和19年に「吉野谷松樹ほか」によって石段が改修されたことが記されている。

北海道神社庁のホームページによると、神社の由来は「文化5年宗谷場所の請負人藤野喜兵衛が松前福山から海産繁殖捕魚円満祈願のため祭神市杵島姫命を奉遷、現在の町役場庁舎裏手斜面に祠を建て弁天社と崇めたのが創祀といわれる。明治9年村社に列せられ同19年春日造りの社殿を建立したが、同22年大豪雨による土砂崩れで埋没し、同年田中伊三郎・渡辺茂兵衛所有地の寄付をうけ明治28年現位置に社殿を建立奉遷、同39年神饌幣帛供進神社に指定された。昭和21年宗教法人となり、現在に至る。例祭日は7月15日とし宵宮祭は14日、16日後日祭を執行し15日16日2日間に渡り神輿渡御を行っていたが現在は15日のみ神輿渡御を行っている」と記されている⁴³。

④尺忍（シャクニン）神社

所在地は尺忍で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「神社の起源は建網漁家村松辰之助漁場の祠であったものを部落神社として継承したものであるといわれ」、「ご神体は古くからあった山の上神社（現存せず）のご神体を納めて」おり、「社殿が古くなり維持管理の問題から自治会館に納めている」と記されている⁴⁴。

また『調査報告』によると、寄進者不明の「慶應四年閏三月吉日」と書かれた「金毘羅祈禱札」が現存するとされるが、確認できていない。

⑤尺忍の稲荷の祠

所在地は尺忍で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「個人あるいは講の運営」で「柿崎番屋のものといわれる」と記されている⁴⁵。

⑥差閉（サシトジ）神社

所在地は差閉で、祭神は八大竜王。

『調査報告』に「社殿正面に明治31年奉納の竜王殿額がかかげられており古くからこの地域の信仰の中心であったと考えられ」、「仏教的要素が強いものであるが、部落神社の役割を果たしている」と記されている⁴⁶。また「明治戊戌（31）年6月15日」「柳谷卯之吉、瀬川福松、斉藤長松、堀内久之助、柳谷要助、柳谷文蔵、石川運吉、今野紋十郎など」と書かれた「竜王殿額」、「明治31年」「講中」と書かれた太鼓、「大正5年6月吉日」「願主 瀬川久次郎、石川鶴吉、建立」と刻まれた「八大竜王碑」が現存している。

なお昭和27年（1952）10月に川田四郎によって石段が改修されたという。

⑦奮部（フンベ）神社

所在地は奮部で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「旧社殿は現在の自治会館のすぐ上で、戦後知床小学校の奉安殿を社殿として使用していたこと」があり、「10年ぐらい前に土砂崩れで社殿が崩壊し自治会館の中に納めている」と記されている⁴⁷。

⑧知床（シレトコ）神社

所在地は尺忍で、祭神は稲荷大神。

『調査報告』に「明治後期頃の創建といわれ」、「学校用地との関連などで社殿は二回移し」、「その後社殿の維持管理の問題から昭和52年に新しく建てた自治会館の中に納めている」と記されている⁴⁸。また「明治27年3月吉日」に「シエトコハナイ 工藤利二、木村勘三郎、佐藤藤作」が寄進した「大太鼓」、「明治40年4月26日」「舎漁場漁夫田口専仁門祈鯨大漁」と刻まれた燈明台（手製）が現存している⁴⁹。

そして、「昭和6年」「九里寅次郎」と彫られた狛犬も現存している⁵⁰。

むすびにかえて－いくつかの考察

これまで見てきた31の社について表1・2・3を参考にして、祭神を見ると稲荷大神を祀る社が23社と多数を占めており、八大竜王を祀っている社が7社と次に多い。また、その他注目したいのは弁天社と見内神社である。では、まずはその弁天社の1つである鉄府の弁天（巖島）の祠についてみていきたい。

(1) 鉄府の弁天（巖島）の祠について

なぜこの祠を着目したのかというと、今回の調査により新たな事実が発見されたからである。

この祠が鎮座する稲穂ノ崎は、『町史』によると元々「イナウ崎」⁵¹と呼ばれていたところであった。この「イナウ」とは、アイヌが儀式に用いるイナウ（木幣）と考えていいだろう。そうすると、この場所はアイヌがイナウを捧げていた神聖な場であった可能性が高い。この点については地形からも想像できる。

この稲穂ノ崎は、対岸の澄海岬スカイと共に入江を形成している。この澄海岬と常スカイに風が強いが、入江の中は穏やかな風であることが多い。この特徴をアイヌは利用して漁に出る湊として使っていたと考えられるだろう。もし湊として使っていたとすれば、丘陵が海中に突き出ているように見える稲穂ノ崎は、沖から戻ってくる船にとっての目印にもなり得るし、漁の安全や豊漁を祈願するカムイノミ（「神に祈る」）が行われる場所にもなりそうである。そう考えると、元々「イナウ崎」と呼ばれていた意味も理解できそうである。

このように、アイヌ社会との関連性が地名や地形から推察される。また、さらに注目したいのはその御神体である。

鉄府在住の古老の話によると、時代は定かではないが、明治以前に地元の漁師が漁の際に網をあげたところ特異な形状の石が網に掛かっていたので、御神体として祀ったのがこの祠の起源であるという。この石については現在調査中であるが、石器である可能性が高い。この点については、調査が終わり次第、別の報告書としてまとめることにする。

この祠のある稲穂ノ崎は、『町史』によると「テフテフ遺蹟」の項目の中に位置づけられ、この崎は「三方は絶壁となり、東方は馬の背となって土器片が見出される」と記されている⁵²。また「この丘はチャシとなっていて」、「テフネフの海辺からは土器片、石器片、骨角器片が発見されている」とも記されている⁵³。

この稲穂ノ崎とチャシとされる丘は現在別々になっているが、稲穂ノ崎はチャシの先端部分であったかもしれない。一説によると、昭和27年（1952）に鉄府漁港を整備した際、このチャシとされる丘の岩石を使用したため、別々のものになったという話も聞かれるが定かではない。この点については、昭和27年以前の写真などが発見されることに期待したい。

ちなみに、海辺から発見された土器類の年代はわからないが、昭和7年（1932）に発見された土器は縄文時代のものであることから⁵⁴、この場所は古くから人々が使用していたと考えられる。

(2) 見内神社について

次に見内神社についてみていきたい。この社は「見内神威」という島内において唯一アイヌのカムイ（神）を祀っている社である。この社について『町史』には「伝説 見ないカムイ」と記している⁵⁵。その内容は以下の通りである。

カフカイの岬角の先端の岩の上に「見ないカムイ」と言われる小祠が祭られている。

この島にアイヌが多く住んでいた頃、アイヌ達はこの岩を非常に恐れて、路を通るにもこの場所を避けて見ない振りをして通行していたので和人が「見ないカムイ」と名付けたものであった。

この恐れて通る岩に対してアイヌ達はニシンが多く獲れたとき、またはトドが沢山獲れたときなどは、トド松の枝を切ってこの場所に捧げたので、この枯枝で森のようになっていた。

明治14・5年頃の出来事であったが、その年のニシン漁が不漁で香深の山本久衛門の支配人某が腹を立てその枯枝に火をかけて焼いて了った。

ところが、この焼け跡に高さ2メートル程の岩が削立しているのが発見された。この岩が「見ないカムイ」の神体であった。

事件後に村には産死が多くなったがアイヌ達は如何にも当然であるかのように話した。「安産の神の罰があつたのだ」と…。

アイヌが、この岩を尊敬し信仰の対象としたのは昔、天塩にカフカという毒婦が悪事のために村人に憎まれ、トドの木で作った檻の中に入れられて海に流されたが、この檻が浪に流れ流れて漂着した所がカフカイの岩の下で妊娠していた彼女はこの場所で安産したことから、この岩がお産の神と祭られるようになり安産を祈る妊婦はトド松の枝を捧げて安産を祈ることになったと伝えられるようになった。

この記述は、大正13年（1924）の『人類学雑誌』に掲載された宮坂光次「見ないカムイ」⁵⁶を元にしたものである。

また、紋別市元紋別の野沢和助氏が語ったものを更科源蔵が著書で「サマイクルカムイが奥さんと喧嘩して、腹をたて宝物を入れた箱を背負って立とうとしたが、背負った縄がブツリ切れて箱がひっくり返ってしまったので、礼文島の東の方に頭が向って反対になっているのだ」と記している⁵⁷。

このように、アイヌ説話を起源とする神社は道内でも珍しいのではないだろうか。この社もまた神社信仰とアイヌ社会と関係性を物語っていると言えるだろう。ちなみに、現在の社は香深井の町内会が持ち回りで管理しているという。

(3) 狛犬研究の成果から

加えて、礼文島に現存する狛犬を有する社は礼文神社、巖島神社、差閉神社、知床神社の4社である。大沼神社にも吽形の一部が残っているので、元々鎮座していたのであろう。

まず礼文神社の狛犬について、「調査報告」によると「明治38年春」「越前国鮎川 本藤茂助」と彫られていることから⁵⁸、明治38年（1905）に「越前国鮎川」（現：福井県福井市鮎川町）の「本藤茂助」が寄進したこととわかり、礼文島内で年代の判明している狛犬の中で最も古いものと言える。また丸浦正弘氏はこの狛犬について、その形はかなり風化が進んでいるが「出雲座り型」であり、これは北前船で日本海沿岸に広く運ばれたものであると指摘している⁵⁹。この先から明治30年代後半においても北前船が礼文島を訪れていたことと推測される。

次に巖島神社の狛犬について、「調査報告」によると「昭和三十四年」と彫られていることから奉納された年次が判明するが台座に「金婚記念」と彫られていることから、奉納理由が奉納者である「中村栄松、スエ」の結婚50周年の記念としてということになるので、それ以前に別の狛犬が鎮座していた可能性が高い。

また、差閉神社の狛犬について、藤沢氏は「奉納された年代や奉納者に関する記録は全くな」く、「目や体の一部が欠けているが、尾の細かな表現や渦巻き状の体毛などは比較的よく残されている」と記されている⁶⁰。また口を開けた阿像は向かって右側に、口を閉じた吽像は向かって左側」と一般的な配置と左右反対であるとも指摘している⁶¹。

そして、知床神社の狛犬について、「調査報告」は、「昭和6年」と「久里寅次郎」と台座に奉納年代と奉納者が彫られている。また藤沢氏は「全体的に若干風化が進んではいるが、朱塗りされてやや大きめに開けた口や粗めの体毛、足の先などがしっかりと表現されて」といると記している⁶²。

ちなみに、大沼神社の狛犬は「吽形」しか現存していないが、藤沢氏によると、「風化」により「下あごや脚などが大きく破損し、表面も一部剥落しているため本来の姿勢が分かりにくい」が非常に珍しい「伏せ」の姿勢であり、「体にはりついた尾やのこぎりのような歯、横に伏せた耳」などから「江戸系」と指摘している⁶³。

(4) 全体を通して

以上のようにみてきたが、祭神で最多であった稲荷大神は稲を象徴する穀霊神・農耕神であるのに、稲作を行えない礼文島においてなぜ祀られるのか。そ

これは北海道における稲荷信仰の特異性によるものと考えられる。北海道において稲荷信仰は、古くから鯨の神と称され、漁業との結びつきが強かった。そのため近世後期以降の追鯨によって開拓された西沿岸の各地の漁村では弁天社と共に建立されたと言われている⁶⁴。またその多くはもともと社格をもたない無願社であり、神官もいなく、集落の人たちの信仰心によって支えられてきたものである。

一方、弁天社について矢島氏は、「近世においては漁業信仰としての流行的な性格をもち、場所請負人が自己の場所（商場）の守り神として建立した祠に起源をもつ場合が多いと考えられ」るため、「その地方の産土神として場所の中心地である運上家の近くに建てられることが多い」、だから「最初から公的な性格を与えられた神であったということが出来る」と述べている⁶⁵。

そして、雄冬岬以北の弁天社において、古い歴史をもち後に村の中心的な神社となったものが12社存在し、この中に文化元年（1804）に建立された香深の巖島神社が含まれていることから古くから「公的な性格を持つ神」であったことがうかがえよう。

つまり、弁天社は「公的」、稲荷社は「私的」なものであったと考えられる。そうすると、場所請負人が場所整備の一環として建立した弁天社が島内において歴史が古く、次第に和人の移住が増え各地域で鯨漁が盛んになっていくと、各港で豊漁を祈願して建立された稲荷社は、次に歴史が古いことになる。言い換えれば、弁天社より古い稲荷社が存在しないはずであり、島内における和人の移住の変遷に伴って稲荷社が建立されていったので、「公的」な弁天社よりも「私的」な稲荷社の方が多くは、現状と一致する。

しかし、次に問題になるのが八大竜王を祀る社の位置づけである。この八大竜王とは、観音菩薩を守護する龍神と考えられているが、仏教が伝来する以前から日本の各地域で水神として龍を祀っていた信仰が起源とも言われている。また龍神信仰は、雨乞いや河川氾濫の防止といった水に関する祈願を主としている。

この龍神信仰がどのように礼文島と関係しているのかについては、筆者の力量を超えるため今回は取り扱わないが、この点は今後の課題の1つとしていきたい。

また今後の課題としてもう一つ挙げるとすれば、今回は神社信仰を取り上げたが、礼文島の人々の信仰としてもう一つの側面は仏教寺院ではないだろうか。なぜなら寺院を建立するに際して、僧侶をどこから呼ぶのかが、その地域に移住してきた人々の出身地と関係している可能性があるからである。そこで、今後は寺院についても調査していきながら、礼文島の歴史を探っていきたい。

〔表1〕

			市杵島姫命 (弁天社)	稲荷大神 (稲荷社)	八大竜王 (龍神)	その他
北部	西	海驢島の弁天（巖島）の祠	○			
		須古屯神社		○		
		鮑古丹神社		○	○	
		江戸屋神社		○		
		浜中神社		○		
		浜中の稲荷の祠		○		
		鉄府神社		○		
	鉄府の弁天（巖島）の祠	○				
	東	大沼神社			○	天照大神 大国主神
		礼文神社				天照大神 大海積命
		船泊の竜神の祠			○	
		幌泊神社		○	○	
		高山神社		○		
		高山の稲荷の祠		○		

〔表2〕

			市杵島姫命 (弁天社)	稲荷大神 (稲荷社)	八大竜王 (龍神)	その他
中部	西	西上泊神社		○		
		召国の稲荷の祠		○		
		宇遠内神社		○		
	東	赤岩第一区稲荷神社		○		
		内路神社		○		
		起登臼神社		○		
		見内神社		○		見内神威

〔表3〕

			市杵島姫命 (弁天社)	稲荷大神 (稲荷社)	八大竜王 (龍神)	その他
西		元地神社		○	○	
		元地の竜神の祠			○	
南部	東	手然の稲荷の祠		○		
		津軽町神社		○		
		巖島神社	○			事代主命 三吉大神
		尺忍神社		○		
		尺忍の稲荷の祠		○		
		差閉神社			○	
		奮部神社		○		
		知床神社		○		

(注)

- 1 礼文町役場企画室『礼文町史』(1972年) 850～853頁。
- 2 矢島睿「礼文島における神社信仰について」(『北海道開拓記念館調査報告』第22号) 1983年。および矢島睿・赤松守雄「近世蝦夷地西沿岸における弁天社の建立について」(『北海道開拓記念館調査報告』第24号) 1985年。
- 3 藤沢隆史等「宗谷管内所在の狛犬」(利尻町立博物館『利尻研究』第28号) 2009年。
- 4 矢島 (1983) 78頁。
- 5 矢島 (1983) 78頁。
- 6 矢島 (1983) 78頁。
- 7 矢島 (1983) 78頁。
- 8 矢島 (1983) 78頁。
- 9 矢島 (1983) 78頁。
- 10 矢島 (1983) 78頁。
- 11 矢島 (1983) 79頁。
- 12 矢島 (1983) 78頁。
- 13 矢島 (1983) 78頁。
- 14 矢島 (1983) 78頁。
- 15 矢島 (1983) 78頁。
- 16 『町史』 853頁。

- 17 『町史』 853頁。
- 18 矢島 (1983) 77頁。
- 19 矢島 (1983) 79頁。
- 20 矢島 (1983) 79頁。
- 21 『町史』 852頁。
- 22 『町史』 852頁。
- 23 <https://hokkaidojinjacho.jp/>礼文神社/
- 24 矢島 (1983) 78頁。
- 25 矢島 (1983) 78頁。
- 26 矢島 (1983) 78頁。
- 27 矢島 (1983) 78頁。
- 28 矢島 (1983) 78頁。
- 29 矢島 (1983) 78頁。
- 30 矢島 (1983) 78頁。
- 31 矢島 (1983) 78頁。
- 32 矢島 (1983) 78頁。
- 33 矢島 (1983) 79頁。
- 34 矢島 (1983) 77頁。
- 35 矢島 (1983) 77頁。
- 36 矢島 (1983) 79頁。
- 37 矢島 (1983) 77頁。
- 38 矢島 (1983) 78頁。
- 39 矢島 (1983) 79頁。
- 40 矢島 (1983) 78頁。
- 41 矢島 (1983) 77頁。
- 42 八島 (1983) 77頁。
- 43 <https://hokkaidojinjacho.jp/>巖島神社-9/
- 44 矢島 (1983) 77頁。
- 45 矢島 (1983) 78頁。
- 46 矢島 (1983) 77頁。
- 47 矢島 (1983) 77頁。
- 48 矢島 (1983) 77頁。
- 49 矢島 (1983) 79頁。
- 50 矢島 (1983) 79頁。
- 51 『町史』 81頁。

- 52 『町史』 81頁。
- 53 『町史』 81頁。
- 54 『町史』 81頁。
- 55 『町史』 575頁。
- 56 宮坂光次「見ないカムイ」（『人類学雑誌』 第39卷第7・8・9号）1924年。
- 57 更科源蔵『アイヌ伝説集－更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅰ－』（みやま書房，1981年）285頁。
- 58 矢島（1983）79頁。
- 59 丸浦正弘「ほっかいどうの狛犬」（中西出版株式会社）2007年
- 60 藤沢（2009）81頁。
- 61 藤沢（2009）81頁。
- 62 藤沢（2009）81頁。
- 63 藤沢（2009）81頁。
- 64 矢島（1983）72頁。
- 65 矢島（1985）89-90頁。

